

日系ブラジルの女性文化に関する一考察 ——ブラジルの「ニッケイ」と日本の「デカセギ」を比較して——

山出 裕子

はじめに

2008年は、日本人が笠戸丸に乗って、神戸港を出発しブラジルへ移民してから、ちょうど100年目にあたり、日本とブラジルの各地で、それを記念する行事が開かれた。外務省はこの年を「日伯交流」年とし、その記念事業に登録された公式イベントは全部で500近くを数えた（2009年1月現在）。

日本とブラジルの交流を記念するにあたり、それは、「祭（またはフェスタ）」という形でイベント等を開催するにとどまらず、その勢いは、これまであまり「ブラジル研究」としてとりあげられてこなかった分野についての研究分野にまで及んでいた。例えば、この交流年に先駆けて、2007年に『私たちのブラジル移民史』が出版されたことは、これまで「ジェンダー」の視点で語られてこなかった、日本人のブラジル移民に関する学術分野での広がりを示している。また、交流年事業の一環として開催された『国際会議 ブラジル日本人移民100年の軌跡』（於 立教大学、2008年10月25-26日開催）においても、これからのブラジル研究に関する課題として、「ジェンダーの視点」による日本人ブラジル移民研究が不在であったことが、パネラーから挙げられていた（上智大学の三田千代子教授など）。こうした現状から、本論では、日本人がブラジルに移民して作り上げてきた、日系ブラジル文化の100年について、特に「女性」に注目し、これから「ジェンダーの視点」でのブラジル研究が、さらに発展していくための道筋を示したい。本論に先立ちエスプリト・サント連邦大学のアルティノ・シルバ（Altino Silveira Silva）らの研究報告では、日本人がブラジルに移民した頃の、ブラジルにおける女性のおかれた社会的状況が紹介されている。それを受けて、本論では、当時の日本社会における女性の立場について簡単に紹介し、ブラジルに移民した当時の日本人女性たちの体験した文化的ギャップがどのようなものであったかを一つの検討材料としたい。また、ブラジルにおける「ニッケイ」女性たちが、どのような生活を強いられていたかを、ブラジルの日系二世の女性監督であるチズカ・ヤマザキの作品から考察したい。

一方で、かつて日本からブラジルへと移民をしていった日本人とは反対に、近年、ブラジルから日本へ渡ってくる日系の子孫たちが多く見られる。それらのいわゆる逆移民する日系ブラジル人たちは、一般に「デカセギ」といわれる。そして彼らが日本で作り出している「デカセギ」文化とは、かつて日本人がブラジルに持ち込んだブラジルの「ニッケイ」文化とも、日本に見られる他の外国人文化とも、異なる特徴を持っている。ここでは「デカセギ」（日系ブラジル人）たちが、現在の日本に作り出している文化について、「デカセギ」の経験を持つドキュメンタリー監督エリオ・イシイの作品から考察したい。そして、そこで描かれる「デカセギ」の女性たちの文化的特徴を明らかにし、ジェンダーの視点による日系ブラジル文化に関する一つの考察を示したい。

本論では、日本からブラジルへ移民した「ニッケイ」とブラジルから日本へやってくる「デカセギ」の相反するよう見える二つ日系文化のあり方を、特に女性について注目して比較検討していく。それにより、この二つの文化が、おなじ「日系」でありながらも、それぞれ大きく異なった特徴を有しており、そこで与えられている女性たちの役割もまた異なることを、明らかにしたい。そうすることで、「ジェンダー」の視点を通しての、ブラジルの「ニッケイ」文化と日本の「デカセギ」文化のそれぞれの特徴が明らかになり、同時に、「日本」から出発し、ブラジルで育まれた二つの、新たな「日本文化」の存在を示したい。

1. 移民当時の日本とブラジルの女性

前出のシルバラによる報告では、19世紀のブラジルにおける女性を取り巻く社会的状況が、暴力的行為との関係から示されている。このような事実はこれまで、ブラジル日本移民を論じる際にあまり注目されてこなかった点であり、大変興味深い報告である。一方、日本人がブラジルに移民を始めた20世紀初めは、日本における女性文化の大きな転換期でもあった。そのひとつに、この時代に様々な女性（婦人向け）雑誌が刊行されるようになったことがあげられる。このような女性雑誌の興隆には、女性読者の増加と読者層の変化が密接に関係していた。なかでも、この時代に女性向け雑誌として創刊された『女学雑誌』（1885年創刊、女学雑誌社）が、「女学」を説いていたことは、その後の女性の社会や文化への進出を考えていく上で、大いに意義があったといえる。また、日本で最初の女性運動グループ「青鞥」の機関誌である『青鞥』（1911年創刊、青鞥社）は、社会主義的思想による婦人問題論など、当時タブーとされていた話題を扱っていた。こうした問題を扱ったことが、『青鞥』の特徴であったことは、この雑誌が、当時の女性たちのあり方を伝える役割よりも、啓蒙する役割が強かったことをうかがわせる。また、この雑誌では、後に「新しい女」という、新しい生き方を目指し、自分の意思に従って生きるタイプの女性を取り沙汰されるようになった。さらにこの時代は、いわゆる「大正デモクラシー」の開始期でもあり、この政治変動の中で、新しい女性の集団「青鞥社」も伝統的価値観、女性の「家」制度内での役割に対して、抵抗を始めていた。1913年以降には、青鞥社の活動は、それまで目指していた「文学」を通して、女性を啓蒙するための文学集団としての活動から、社会思想集団へと変貌して行った。

ブラジルにおいて、女性が男性への服従に疑問を持ち始めていたように、日本人がブラジルを目指し、海を渡り始めた時代は、日本において、女性が「書く」という手段を通して、自分の意思を発し、それが当時の日本社会の文化的特徴を作り出していた時代であった。以下では、後にブラジルに渡った日本人の女性の中から、その体験を、映像を使って表現する女性を紹介している。それは、日本女性の持つ潜在性が、移民先であるブラジルで開花した一例であったとすることもできるであろう。

2. ブラジルの「ニッケイ」文化における女性

(1) 日本からブラジルへ

1908年に神戸港を出港した笠戸丸によって、日本のブラジルへの移民は開始された。当時、土地があり余るブラジルでは農業労働者が不足しており、一方で、日本の農村は貧しく、当時の日本政府が海

外への移民を奨励し、国策の一環として、ブラジルへの移民が開始されたのである。1920年代に入ると、それまで最大の日本人移民の受入国であったアメリカで、日系人に対する人種差別の激化などにより、日本人移民の受け入れが実質、禁止となった。このことにより、ブラジルが最大の日本移民受入国となったのである。当時のブラジルへの日本人移住者の多くは、移民船の最終目的地となったサントス港を外港とするブラジル最大の都市であるサンパウロ市周辺のコーヒー農園で働いた。その後、第二次世界大戦が勃発し、ブラジルは連合国の一国となり、枢軸国の日本と国交を断絶した。そして、ジェットゥリオ・ドルネレス・ヴァルガス大統領の命令のもと日本語新聞や日本語学校が禁止された。

こうして、日本からのブラジル移民の数は激減していった。現在ブラジルのサンパウロ市のリベルダージ地区を中心に、日系文化が残ってはいるが、そのもととなっているのは、100年前の最初の日本人移民が、ブラジルにも持ち込んだ日本文化である。しかし現在、六世、七世と言う、新しい世代の日系人が誕生する中で、その文化のあり方も当然変化している。たとえば、新しい世代では、日本語の普及率が低く、二世までの世代で、殆どの日系人が日本語で会話をしていたのとは対照的に、新しい世代では、ポルトガル語でほとんどの会話がなされている。このことには、こうした歴史的背景における日本語や日本文化の取り扱われ方が大きく影響しているといえよう。

(2) 「ニッケイ」映像文化と女性——チズカ・ヤマザキの『ガイジン』『ガイジン2』

チズカ・ヤマザキ (Tizuka Yamazaki)

ブラジルの「ニッケイ」文化で特に注目されてきた人物の一人に、女性映画監督チズカ・ヤマザキがあげられる。ヤマザキは1949年にサンパウロ州アンティバイヤ市に生まれた。日系二世の彼女は、10代の頃に、サンパウロ市に移り、建築学を学んだが、専攻を変え、映画を学ぶためにブラジリア大学へと進む。その後、リオ・デ・ジャネイロのフルミネンセ連邦大学映画科へ進み、当時のブラジルで人気を博していた「シネマ・ノーヴォ」¹の巨匠たちの元で映画を学び、助手を務めた。

1980年に、彼女の最初の長編『ガイジン』が完成し、この作品で、ブラジルのグロモドール映画祭最優秀映画賞、カンヌ映画祭特別賞、ジョルジュ・サドゥール賞など、合わせて40近い賞を世界の映画祭で受賞し、大成功を収めた。なお、同作は、1985年に、日本の東京国際映画祭でも上映された。その後も、約10本の短編や長編の映画作品を手がける傍ら、ミュージックビデオや、オペラ『蝶々夫人』の演出なども手がけている。2004年には、この作品の続編ともいえる『ガイジン2』を完成させており、日系、女性、としてではなく、ブラジル人監督として、注目され続けているブラジルを代表する映画監督であるといえる。

『ガイジン』 (Gaijin: Os Caminhos da Liberdade 1980)

1980年に作られたヤマザキの最初の作品『ガイジン』では、日系ブラジル人女性、チトエを主人公とし、1908年に笠戸丸でブラジルに移民した日本人の生活が描かれている。そしてそこには、チトエが、サントス港（サンパウロ州の港）について、初めて見る外国人たちに驚く様子など、日本人女性が、ブラジルに移民した当時の不安や戸惑いが、克明に描かれている。その後、チトエは、当時の他の日本人移民たちのように、コーヒー園で働くために、サンパウロ州内部へと向かっていく。しかし、そこで彼女たちを待っていたのは、夢のような移民生活ではなく、奴隷小屋のような家での暮らしと、働けど働けど一向に金が貯まらず、なおかつ搾取され続ける、苦しい外国生活の現実であった。苦しい生活の中、

夫である山田と徐々に打ち解け、子供をもうけ、一般の家庭生活を送るようになったチトエであったが、ある時、夫の山田はマラリアにかかり死亡してしまう。夫の死後、彼女は、同じ農園で働く日系人らとともに、この過酷な農場生活から集団脱走をする。サンパウロに着いたチトエは、製糸工場で働くようになり、女手一つで、幼い子供とともに、この新しい国で生きていくことになる。

このように、ヤマザキ監督の第一作では、女性を主人公にした、日系ブラジル移民の歴史が描かれている。当時、日本で語られていた日系移民の歴史の多くは、男性の立場から描かれていたことを考えると、この作品は、日系二世の女性の目から見たドキュメンタリー映像として、大きな価値を持っていると言えよう。

『ガイジン 2』 (Gaijin 2: Ama-me Como Sou 2005)

続編となる『ガイジン 2』は、最初の作品から約24年経った、2004年に完成され、2005年に公開された作品である。

この作品では、チトエは、娘のシノブとブラジルで生活をしている。夫を亡くし、娘とともに生きるチトエは、お金を貯め、パラナ州北部のロンドリナ市に家を買う。これは、チトエのブラジルへの定住の決意の表れであると同時に、日本へ帰る夢を延期せざるを得なくなったことを意味している。さらに第二次世界大戦が起こり、ブラジルに住むことに決めたチトエにとって、敵国扱いされる日本へ戻る夢はますます遠のいていく。やがて時代は1940年代に入り、この頃、チトエにはすでに、カズミとマリアという二人の孫がいる。そのうち、マリアのほうは、チトエにとっては「ガイジン」である、スペイン系とイタリア系の血を引くブラジル人、ガブリエルと結婚する。そして、マリアはヨウコとペドロという二人の子供をもうける。やがて、ガブリエルが事業に失敗し、その穴埋めのため、「ガイジン」であったはずのガブリエルが、日系人配偶者のビザを使い、日本にデカセギに行くことになる。そして、彼が向かったのは、ブラジル人のデカセギ労働者が多く住む神戸であった。そこで、1995年の阪神大震災が起こり、震災被害にあったと思われるガブリエルは音信不通となる。彼を探すために、チトエの娘シノブ、その娘で、ガブリエルの妻のマリア、その娘のヨウコは、日本へ向かうことになる。こうして、チトエのかねてからの願いであった日本への帰郷は、彼女の3代にわたる娘たち（娘、孫、曾孫）によって実現されることになる。そして、チトエの娘たちは、日本で、かつて、チトエたち日本人がブラジルでそうであったように、様々な外国人に対する差別や人種の問題などに直面していく。そうするうちに、ブラジルでは、「ガイジン」であり、日本人であると思っていた自分たちが、日本でもやはり「ガイジン」であり、そして、実は自分たちはブラジル人である、ということを思い知らされるのである。

第一作が大きな成功を収めたのとは対照的に、この続編の作品に対する評価はさほど見られない。これは、第一作が持つ、日系移民のドキュメンタリー作品としての価値、そして、女性の外国人監督による作品であることの意義、などが現在では十分に評価されないためであるかもしれない。しかしながら、ブラジル社会だけでなく、「デカセギ」問題が様々な分野で語られている現在の日本社会において、この続編の持つ価値は、第一作のそれに勝るとも劣らないほどのものがあるといえるであろう。ゆえに、今後、日本が「デカセギ」をはじめとした外国人との共生を考えていく上で、第一作、そして続編である第二作にもう一度目を向け、これらのヤマザキ作品の持つ意味をしっかりと評価していく必要があるであろう。

3. 日本の「デカセギ」文化における女性

(1) 「デカセギ」の誕生

1960年代から70年代にかけて好調であったブラジルの経済は、その後の10年で激しいインフレのため急落する。仕事を求めるブラジル人たちは、海外への移住を始めるが、その行き先の一つが、当時、好景気にわいていた日本であった。その後、1990年に日本政府が「入国管理及び難民認定法」（「入管法」）を改定し、日本国籍を有するものとその子孫（日系二、三世まで）、さらにそれぞれの配偶者に日本での就労に制限のない入国を認めた。これにより、在日ブラジル人の数は増え、日本は、アメリカ、パラグアイについて、ブラジル人労働者の多い国となっている。こうして、日本には、仕事を求め、かつ、母国への送金を目的として、日本へ「定住」する、日系ブラジル人移民が急激に増え、近年では、ある種の文化的特徴を持つようになってきている。なかでも、その多くが、群馬県の大泉町、愛知県の実松市など、工場労働者たちが多く住む地域に集中していることは、この移民の特徴の一つである。また、近年、特にこれらの日系ブラジル人の日本への「逆移民」現象について「デカセギ」（Dekassegui）という言葉がつかわれている。彼らは、日本人がブラジルに移民し、やがて「ニッケイ」（Nikkei）といわれるようになったのと同じく、日本に合法的に入国し、労働と送金を目的とし、近年の日本社会に、ひとつのエスニックグループを作り出している。この語源について三田千代子氏は以下のように説明する。

ブラジルでは、一定期間日本で就労するブラジル人を「デカセギ（Dekassegui）」と呼ぶ。もちろん語源は日本語であるが、現在は辞書にも年鑑にも収録されているポルトガル語である。「デカセギ」という言葉がブラジルのポルトガル語に定着した背景には、ブラジルにおける日本移民とその子孫の1世紀に及ぶ存在がある。（三田、p.46）

日本人がブラジルで、ポルトガル語の「ニッケイ」となり、一つの特徴ある文化を作り出しているように、「出稼ぎ」から、「デカセギ」となった、日系ブラジル人も、日本にきた理由が何であれ、現代の日本文化の中に一つ特徴を作り出している。ここでは、日本へ「デカセギ」としてやってきた経験をも持つ、ドキュメンタリー映画監督エリオ・イシイの作品について、そこに見られる女性たちの特徴を中心に考察してみたい。そしてそれを、先に挙げた「ニッケイ」監督作品と比較することで、この二つの日本文化を起源とした新しい文化のもつ特徴を明らかにしたい。

(2) 「デカセギ」の映像文化と女性——エリオ・イシイの『カルタス』『ペルマネンシア』

エリオ・イシイ（Helio Ishii）

サンパウロ大学にて、社会科学を学ぶ。その後、ビデオメーカーとして活動を開始する。演劇、舞台、音楽、映画のグループと関わり、著名なブラジル人映画監督デノア・ジ・オリヴィエラに師事。2000年からは、インターネット上でのビデオの可能性を探るプロジェクトを開始し、2001年に実験映画Fora de Syncを製作し、同年のバイア国際映画祭の招待作品に選ばれる。サンパウロ在住。

『カルタス 日本からの手紙』(2004)

この作品は、3人のブラジルに戻った元「デカセギ」女性のインタビューと、まだ日本から戻らなかった一人の「デカセギ」女性からの手紙（カルタス）からなる。インタビューを行う監督のエリオ・イシイは男性である。三人の女性たちは、マイクを向けられて、なんら隠す様子も見せず、日本での生活の良かった点、悪かった点、日本人に対する評価、日本の男性に対する思いなど、自分たちの体験について正直に語っている。彼女たちの多くは、日本での生活は夢見たものとは異なり、つらく厳しいものであったと言っている。そして、日系人であるとはいえ、彼女たちにとって、日本の生活に馴染むことは難しかったと述べている。

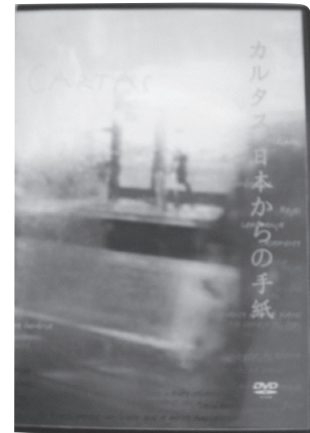
この三人のインタビューを通してわかることは、日本へ来るときの年齢が若いほど、日本での生活に馴染むことができ、ブラジルに戻るよりも、日本に残ることを望んでいる、ということである。逆に、すでにブラジル社会で生活していた女性たちは、日本の生活に馴染むことが難しく、比較的早くブラジルへ戻っている。これは彼女たちのアイデンティティとも関係があると言えよう。「ニッケイ」であるにせよ、ある程度の期間、すでにブラジル社会で生活している女性たちは、ポルトガル語で教育を受け、日本の血を引く「ブラジル人」として、すでに自らのアイデンティティを確立しているのである。つまり、ブラジルにおける「ニッケイ」文化は、すでにブラジルに同化し、それによって、アイデンティティを確立するための力を持っていないのである。

ヤマザキ監督の女性主人公では、日本への帰郷を羨望しながらも、その夢をかなえることができず、その代わりに、日本を見たことがない娘や孫たちが日本を訪れた。それとは反対に、「カルタス」の女性たちは、日本へデカセギとして、あるいはその家族としてやって来た後、ブラジルへと戻っていく。それは、彼女たちが日本において、「ブラジル人」であるというアイデンティティをより強く持つようになったということも、一つの理由であると言える。なぜなら、現在の日本では、彼女たちは「外国人」として扱われ、日系人であっても決して日本人として生きることができないからであり、そうした外国人に対する日本の態度を、このドキュメンタリーは明らかにしていると言えるであろう。

『ペルマネンシア この国にとどまって』(2006)

この作品は、日本に住む「デカセギ」の子供たちへのインタビューからなる。彼らの多くは、日本で教育を受け、日本の大学へ進学している。しかし、彼らにとって、日本で就職口を見つけるのは難しい。それでも彼らは様々な理由から、大学卒業後も、日本にとどまり、「デカセギ」がもっと日本社会に受け入れられるための活動をしていきたい、との抱負を口にしている。

これまで、「デカセギ」の生活がどのようなものであるかについては、ポルトガル語の新聞、雑誌、テレビなどのメディアで語られることが多かった。ゆえに、日本人にとっては「デカセギ」文化はやはり外国文化であって、日本にいる外国人たちの問題とされが



© 2004 Helio Ishii



© 2006 Helio Ishii

ちであった。しかしながら、日本で教育を受けた「デカセギ」二世たちが、日本へ留まり、彼らの持つ問題意識などを、日本語で発信するようになり、「デカセギ」は、日本の文化の中に一つの場所を占めるようになってきているといえる。ゆえに、「デカセギ」の子どもたちが、日本で日本語による教育を受け、大学を卒業し、社会人となっている現在、その日本文化に果たす役割は、より大きくなっているのである。特に、ブラジル人の子供たちの教育問題、日本社会への同化問題は、すでに重要な課題となっている。

前作の『カルタス』がすでに日本を離れ、「デカセギ」であった頃の日本生活の回想録であったのと反対に、『ペルマネンシア』は、現在も日本に生活し、日本社会と文化において、「デカセギ」「外国人」以上の何かになろうとしている日系人たちのドキュメンタリーである。特に『ペルマネンシア』において、「デカセギ」家族の女性たちは、日本人として日本社会に同化し、「デカセギ」としてよりは、もう一つの「ニッケイ」文化として、自分たちの持つブラジル文化を日本に根付かせて行きたい、と言う思いが語られている。彼女たちの意思を実現するには、これから多くの課題があると思われるが、これまでのように一時的に日本へ労働目的で滞在するだけでない、もう一つの「デカセギ」文化がこれから日本に存在していく可能性があることは、やはり日本文化の新たな一面であるといえよう。100年前に日本からブラジルへ移住し、「ニッケイ」文化としてブラジルで一つの文化を築き、その後、再び日本へ戻ったことで、逆輸入された日本文化は、日本に新たな「ニッケイ文化」を創造しようとしているのである。

おわりに

日本からブラジルに最初の移民が渡ってから一世紀が過ぎた。移民した日本人たちは「ニッケイ」となり、近代のブラジル社会に、一つの文化的特徴を作り上げてきた。一方で、1980年代頃から日本へ「デカセギ」としてやってきた日系ブラジル人たちは、再び日本に戻ることで、ブラジル文化内で作りかえられた日本文化の存在を我々に明らかにしてくれている。日伯交流年にあたって、日本とブラジルでは様々な行事が行われ、我々は、日本におけるブラジル文化の存在を改めて思い知ることとなった。そして、この日伯交流年は、これで終わるのではなく、さらにこの関係を発展させていくためのものではなくてはならないであろう。ゆえに、これまであまり知られることのなかった日本とブラジルの間に存在しているもうひとつの日本文化、そして、その価値を、我々はしっかり認識しておくべきであろう。そうすることで、我々は、これまで気づかなかった日本文化の世界への広がり、改めて知ることが出来るであろう。

(やまで・ゆうこ/お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究機関研究員)

注

- 1 シネマ・ノーヴォ (Cinema Novo) とは、ポルトガル語で「新しい映画」を意味する。第二次大戦後 1940 年代後半からのイタリアのネオレアリズモは、現代風で実験的な新しいタイプの映画を起し、各地で、若い世代による映画製作を活気づけた。その後、1950 年代からフランスの「ヌーヴェルヴァーグ」がそのあとを追いかけた。ブラジルでは、それらの流れが「シネマ・ノーヴォ」となって実現し、国民的映画の製作のための新理想について議論され

た。特に、1954年にサンパウロのメジャー映画会社、ヴェラクルス撮影所（Vera Cruz、1949 — 1954年）が破産した際、これに失望した若者のグループが、もっとリアルで、より充実した内容を持ち、しかもより低コストで映画を製作するよう奮闘し、問題を解決したものが「シネマ・ノーヴォ」であったと言われている。

参考文献

【和書】

- 足立伸子編、吉田正紀、伊藤雅俊訳『ジャパニーズディアスポラ』新泉社、2008。
イシ、アンジェロ「在日（日系）ブラジル人の現在の動向と意義」『独協インターナショナル・フォーラム』（2007）。
日下部良武 監修『女たちのブラジル移民史』毎日新聞社、2007。
ナジブ、ルシア 編、鈴木茂 監修・監訳『ニュー・ブラジリアン・シネマ』プチグラパブリッシング、2006。
細川周平『シネマ屋、ブラジルに行く——日系移民の郷愁とアイデンティティ』新潮選書、1999。
前川隆『エスニシティと日系人 文化人類学的研究』御茶の水書房、1996。
三田千代子「ブラジルの日本人、日本のブラジル人」『ソフィア』第56巻第1号（2007）。

【洋書】

- de Carvalho, Daniela. *Migrants and Identity in Japan and Brazil: The Nikkeijin*. London: Routledge, 2002.
Goodman, Roger, Ceri Peach, Ayumi Takenaka and Paul White, eds. *Global Japan: The Experience of Japan's New Immigration and Overseas Communities*. London: Routledge, 2003.
Lesser, Jeffy. *Negotiating National Identity: Immigrants, Minorities, and the Struggle for Ethnicity in Brazil*. Durham: Duke UP, 1999.
_____, ed. *Searching for Home Abroad: Japanese Brazilians and Transnationalism*. Durham: Duke UP, 2003.

【映像資料】

- イシイ、エリオ（Ishii, Helio）『カルタス 日本からの手紙』配給 アムキー、2004。
_____. 『ベルマネンシア この国にとどまって』配給 アムキー、2006。
Yamazaki, Tizuka. *Gaijin: Os Caminhos da Liberdade*. CPC-Centro de Produção e Comunicação / Embrafilme, 1981.
_____. *Gaijin 2: Ama-me Como Sou*. Scena Filmes / ArtFilms / Quanta / Riofilme, 2005

【雑誌特集】

- 「特集 隣の外国人」『現代思想』2007年6月号。
「特集 ブラジル移民100年——デカセギ20年」『オルタ』2008年1月号。
「特集 ブラジル移民百年」『すばる』2008年7,8月号。

「梅麩御供」(その6)

一月二十九日(四八日目)

廿九日朝奠 雨午後晴

猪口 いりな 御汁 結かんびう

平 山芋 すめ 御飯 はぶき

御湯 香たけ

午後奠

菓子 つまみ羊羹 御茶 薄茶

夕奠

猪口 ちさ 御汁 みそ

平 山の羊 すめ 御飯 しいたけ 御香物 なら漬茄子

御酒 溜りに 御向話 竹の子

一献 はぶき 一献 うど短冊 二献 をわらび

御湯 羊羹

薄茶 世並屋

饅頭 猪之助

玉山堂 玉

二月朔日忌明け其ノ上ニ此日剛日ナレバ直ニ御祈禱スベキ苦
ナレトモ享翁様御忌日ニ付御忌祭斗ニテ御祈禱ノ事ハ
七ノ層ヲシラベタルニ三日剛日ニアル故前ノ二日二祈
堂開扉上香翌日御祈禱ノ事ヲ報告ス主人斗ニテ
親戚皆ニ拜ニ不及三日開扉上香高祖考ヨリ各位
不残酒肴ヲ献ス此日始テ吉祭トス饗ハ全体奴婢ニ
可申ナレド既忌明け後三日ニモ相成ル故親戚ノ者此
ヲ頂戴シテ轉進ヲナトス

天保十五載甲辰二月四日
復讞

「梅麩御供」(その5)

小竹 佐知子、大久保 恵子 「梅麩御供」の翻刻と解説

一月十九日(三八日)

十九日朝奠 陰
 猪口 みつば 御汁 名指味増
 平 薄粉 御飯 御香物 平くき
 午後奠 御湯
 菓子 駿河屋羊羹 御茶
 夕奠 御汁 みぞ やきとうふ
 猪口 すせうゆ 御飯 御香物 平くき
 平 すめ 御飯 御香物 平くき
 御向詰 竹の子油あげ
 御酒 御皿 大のり寿し
 御肴 御肴 御皿 大のり寿し
 御湯 御肴 御皿 大のり寿し
 御湯 御肴 御皿 大のり寿し

一月二十日(四〇日)

廿一日朝奠
 猪口 はた 御汁 はつき
 平 うぼ 御飯 御香物 平くき
 御湯 御湯
 菓子 白あん饅頭 御茶
 右茶菓係午後奠
 夕奠 御汁 すめ
 猪口 よめな 御飯 御香物
 平 すまし 御飯 御香物
 御向詰 蓮根溜りに
 御酒 御肴 巻寿し
 御肴 御肴 巻寿し
 御湯 御肴 巻寿し

一月二十三日(四二日)

廿三日朝奠 晴
 猪口 和布 御汁 山の葉小口
 平 すまし 御飯 御香物 京菜
 午後奠 御湯
 菓子 太白あん 茶
 夕奠 御汁 すまし
 猪口 豆製 御汁 しいたけ
 平 豆製 御飯 御香物 京菜
 御向詰 栗衣あげ
 御酒 御肴 御肴 しいたけ
 御湯 御肴 御肴 しいたけ

一月二十五日(四四日)

廿五日朝奠 晴
 猪口 和布 御汁 三葉
 平 すまし 御飯 御香物
 午後奠 御湯
 菓子 唐菓 長兵衛献 御茶
 夕奠 雨
 御皿 若巻寿し 御平 うど
 御向詰 栗衣製進かまぼこ
 御酒 竹の子 香たけつけしふりかけ
 御肴 御肴 贈 夕奠所用数品皆種久次郎
 御湯 御肴 贈 夕奠所用数品皆種久次郎

一月二十七日(四六日)

廿七日朝奠 好晴
 猪口 ほうれん 御汁 うどこぐち
 平 すまし 御飯 御香物 京菜
 午後奠 御湯
 菓子 唐菓 御茶
 夕奠 御坪 だし
 御皿 海苔ひどりて
 御酒 御肴 津村正五郎
 御湯 御肴 津村正五郎

一月二〇日(三九日)

廿二日朝奠 好晴日
 猪口 すせうゆ 御汁 しめたけ米
 平 すめ 御飯 御香物 平くき
 午後奠 御湯
 菓子 饅頭 御茶
 夕奠 御汁 みぞ
 猪口 ちしや 御飯 御香物 平くき
 平 すめ 御飯 御香物 平くき
 御向詰 蓮根塩ゆで
 御酒 御肴 味増ある
 御肴 御肴 味増ある
 御湯 御肴 味増ある
 御湯 御肴 味増ある

一月三十一日(四一日)

廿二日朝奠 好晴日
 猪口 しめな 御汁 ゆば
 平 清蒸 御飯 御香物 平くき
 午後奠 御湯
 菓子 やき饅頭 御茶
 夕奠 御汁 味噌
 御飯 御肴 青苔
 御酒 御肴 竹の子
 御肴 御肴 竹の子
 御湯 御肴 竹の子

一月二十四日(四三日)

廿四日朝奠
 猪口 おろし 御汁 栗秋冬
 平 すまし 御飯 御香物
 午後奠 御湯
 菓子 唐菓 御茶
 夕奠 葉の御飯
 田菜 和 三葉の丹ゆで
 御酒 御肴 山平小口ニ
 御肴 御肴 山平小口ニ
 御湯 御肴 山平小口ニ

一月二十六日(四五日)

廿六日朝奠 風大勢
 猪口 平くき 御汁 味噌
 平 すめ 御飯 御湯
 午後奠 御湯
 菓子 唐菓子 御茶
 夕奠 御汁 味噌
 猪口 ほうれん 御汁 青みきりて
 平 すめ 御飯 御香物 京菜
 御向詰 衣揚げ
 御酒 御肴 衣揚げ
 御肴 御肴 衣揚げ
 御湯 御肴 衣揚げ

一月二十八日(四七日)

廿八日朝奠 好晴
 猪口 やき味増 御汁 平くき
 平 すめ 御飯 御香物 梅肉
 午後奠 御湯
 菓子 薄かわ餅 御茶
 夕奠 御汁 しめたけ米
 猪口 よめな 御飯 御香物 京菜
 平 すめ 御飯 御香物 京菜
 御向詰 大根をろし
 御酒 御肴 味増ある
 御肴 御肴 味増ある
 御湯 御肴 味増ある
 御湯 御肴 味増ある

「梅颯御供」(その3)

二月二十八日(二十八日)

廿八日朝奠 美晴如春
 猪口 こんにやく 御汁 味噌
 平 味噌 御飯 御香物 ひんぐき
 御茶 午後奠
 御菓子 唐くわし 御茶
 夕奠 御香物 あさづけ
 蕎麦 御酒 御着 慈姑 大阪邸

一月二日(二〇日)

甲辰元日朝奠 美晴
 雑煮 餅 御酒 厚蘇
 猪口 梅ほうし 御汁 水な
 平 水な 御飯 御香物 あさづけ
 午後奠 御菓子 白あん饅頭
 茶 御茶 御着 二枚ほし 御茶

一月三日(二一日)

三日朝奠 此日前美晴後陰
 献烹 山の羊 御酒 沙糖
 猪口 ほうれん草 御汁 みたば
 平 やきとうふ 御飯 御香物 ひんぐき
 御茶 午後奠 御菓子 白あん饅頭
 御茶 御着 糎科醤油 竹原手製 進藤

一月五日(二四日)

五日朝奠 不辨只尺
 猪口 みる 朝奠 御汁 みたば
 平 天守寺か 御飯 御香物 平ぐき
 御茶 午後奠 御菓子 松風佐一郎献茶
 夕奠 猪口 紅梅肉 御汁 みたば
 平 香茸 御飯 御香物 平ぐき
 御向詰 大しめたけ 御茶 御着 せうゆ 御茶

一月七日(二六日)

七日朝奠
 七菜羹 御着 血 青豆
 御酒 御香物 京菜かふ之所
 御茶 午後奠 御菓子 たるの梅 御茶
 夕奠 猪口 をろし大根 御汁 味噌
 平 干大根 御飯 御香物 朝漬
 御向詰 慈姑わきり 御着 袖もち 御茶

二月二十九日(二十九日)

癸卯除夜 晴微陰 朝奠
 猪口 水菜 御汁 味噌
 平 慈姑佐一郎所献 御飯 御香物 之所焼みそ
 午後奠 茶 菓子 大焼饅頭
 夕奠 猪口 よめなもの 御汁 味噌
 平 天王寺か 御飯 御香物 平ぐき
 御向詰 砂髪かけ 御茶 浅草海苔 三白所贈 ねぎ

二月二日(二二日)

二日朝奠 美晴
 献烹 味噌 餅 御酒 京菜
 猪口 糸きりて 御汁 家製味噌
 平 大根をろし 御飯 御香物 京菜
 御向詰 袖もち 御茶 上菓 後園 竹原土産
 御着 溜りに 御茶 夜の梅

一月四日(三三日)

四日朝奠 雨
 猪口 よめ菜 御汁 味噌
 平 ほうれん草 御飯 御香物 沙糖
 御茶 午後奠 御菓子 白あん饅頭
 御茶 御着 御吸物 ミしいたけ 中井修治

一月六日(二五日)

六日朝奠 雨
 猪口 京菜の香物 御汁 味噌
 平 平菜 御飯 御茶
 御菓子 松風 御茶
 夕奠 猪口 平な 御汁 味噌
 平 薄ふ 御飯 御香物 朝漬
 御向詰 溜りに沙糖いれ 御茶 御着 沙糖かけ

一月八日(二七日)

八日朝奠 微晴
 猪口 平ぐき 御小皿 やき味噌
 御茶漬 御飯 要餅やきて 御茶
 午後奠 御茶 御菓子 白あん小饅頭
 夕奠 猪口 ほうれん草 御汁 味噌
 平 生葱 御飯 御香物 京菜
 御向詰 生姜味噌 御茶 蕨根 衣揚

「梅麩御供」(その2)

二月十九日(九日)

十九日朝食	猪口 神馬草	御汁 青のり
	平 凍豆腐	御飯 御香物 ひらぐき
	午後食	御茶
	御菓子 唐くわし	御茶
夕食	猪口 かんぴう	御汁 中みそ
	平 磯頭ふ	御飯 御香物 ひらぐき
	御向詰 さかに	御茶 九段文鼎
御酒	御香物 こんやく	御茶 海苔
御香	結干ば	御茶 生味噌

二月二十日(一日)

廿一日朝食	猪口 ほうれん	御汁 中みそ
	平 かんぴう	御飯 御香物
	午後食	御茶
	御菓子 薄かわ餅	御茶
夕食	猪口 寿し	御吸物 中村宗碩
	皿 御吸物	御茶
御酒	御香物	御茶
御香	なまたけ	御茶

二月二十三日(三日)

廿三日朝食	猪口 ちしや	御汁 やきとうふ
	御平 干瓢	御飯 御香物 やき味噌
	午後食	御茶
	御菓子 つまみ	御茶
夕食	猪口 すあゑ	御汁 前みそ
	平 生あけ	御飯 御坪ふの葛に
	御向詰 聖燈	御香物 あさづけ
御酒	御香物 芋のあけもの	御茶
御香	結干ば	御茶

二月二十五日(五日)

廿五日朝食	猪口 こんやく	御汁 やめな
	平 口ぼろ	御飯 御香物 あさづけ
	午後食	御茶
	御菓子 寿し餅	御茶
夕食	猪口 よめな	御汁 中みそ
	平 土筆	御飯 御香物 あさづけ
	御向詰 葱姑	御茶
御酒	御香物 聖燈	御茶
御香	海苔汁	御茶

二月二十七日(七日)

廿七日朝食	猪口 ちしや	御汁 かんざらし
	平 団口凍豆腐	御飯 御香物 の所 梅肉
	午後食	御茶
	御菓子 唐くわし	御茶
夕食	猪口 酢油	御汁 中みそ
	平 大根をろし	御飯 御香物 あさ漬
	御向詰 葱姑	御茶
御酒	御香物 粗土中と堀出候分備美助献上	御茶
御香	江左献上	御茶

二月二十日(一日)

廿日朝食	猪口 大根をろし	御汁 中みそ
	平 葱姑わきり	御飯 御香物 あさづけ
	午後食	御茶
	御菓子 やき磯頭	御茶
夕食	猪口 ほうれん	御汁 中みそ
	平 ほうれん草	御飯 御香物 かふ薄くきりて
	御向詰 生味噌	御茶
御酒	御香物 小食ふ	御茶
御香	結干ば	御茶

二月二十三日(三日)

廿二日朝食	猪口 紅梅肉	御汁 葱姑
	平 水菜	御飯 御香物 あさづけ
	午後食	御茶
	御菓子 主薬	御茶
夕食	猪口 糸酒にんじん	御汁
	平 ほうれん	御飯 御香物 あさづけ
	御向詰 豆腐	御茶
御酒	御香物 結干ば	御茶
御香	なまたけ	御茶

二月二十四日(四日)

廿四日朝食	猪口 上め菜	御汁 味噌
	平 梅干ば	御飯 御香物 梅肉
	午後食	御茶
	御菓子 主薬	御茶
夕食	猪口 土筆	御汁 名産味噌
	平 しめじ	御飯 御香物 ひらぐき
	御向詰 初わらび	御茶
御酒	御香物 伊丹製	御茶
御香	結干ば	御茶

二月二十六日(六日)

廿六日朝食	猪口 やき	御汁 しめじ
	平 みるだん	御飯 御香物 ひらぐき
	午後食	御茶
	御菓子 きなこ餅	御茶
夕食	猪口 生あけ	御汁 中みそ
	皿 せり	御飯 御香物 土筆
	御向詰 生味噌	御茶
御酒	御香物	御茶
御香	結干ば	御茶

此御香御常例ニ
相増候得共丁度御酒類
同人よりヒ献上候故也

御香 江左献上
一 葱姑のり
二 凍豆腐
生山香たけい
生山半よせ
あけもの

【上】「梅颯御供」(その1)〔天保一四年(一八四三)二月九日没〕

二月一日(二日目)

天保癸卯十二月十一日癸引
 御猪口 ほうれんそう 御汁 ふきのとう
 御平 山のいも 御飯
 御向話 ますこ 御酒 養老酒 御香物 ひらくき
 御菓子 千代菊 御肴 くわい 御茶 さかか

二月二日(二日目)

十二日朝奠
 御血 まき昆布 御汁 いもまき
 御飯 御茶 午後奠 御菓子 小倉野 御茶

二月三日(三日目)

十三日朝奠
 御猪口 こんやく 御汁 さいび干鰯
 御血 かんまるやき 御飯 御香物 ひらくき 御茶
 午後奠 御菓子 やき饅頭 御茶
 夕奠 御猪口 春菊したし物 御汁 さいび干鰯
 御平 にんじんそぼろ 御飯 御香物 ひらくき
 御向話 枇杷巻葉 御酒 養老酒 御肴 生姜味噌 御茶

二月五日(五日目)

十五日朝奠
 御雑煮 餅きょうふ 御香物 あさつげ
 御茶 午後奠 御菓子 唐菓子 御茶
 夕奠 御猪口 干しんじん 御汁 水な
 御平 (餅ま) 御飯 御香物 ひらくき
 御向話 (餅ま) 御酒 養老酒 御肴 加菜 砂糖 御茶

二月七日(七日目)

十七日朝奠
 御献煮 あんびん餅 御香物 奈良漬
 御茶 午後奠 御菓子 やき饅頭 御茶
 夕奠 御そぼ 御加菜 大根をろし
 御だし 御肴 しゃば 御酒

十一日夜祭奠

御猪口 大根をろし 御汁 すめ
 御平 くすかけ 御飯
 御向話 こんやく生姜 御酒 養老 御香物 ひらく
 御肴 みかんさかに 御茶 御菓子 押かき

夕奠 十二日

御猪口 大こんをろし 御汁 しんたけ
 御平 かんびう 御飯
 御向話 か後塘沙 御香物 あさつげ 御茶

十四日朝奠

御猪口 お豆腐 御汁 山の手
 御平 凍豆腐 御飯 御香物 秋冬花の
 御菓子 ひくわし 御茶
 夕奠 御猪口 ちじや 御汁 ちば
 御平 青の手 御飯 御香物 あさつげ
 御肴 生姜味噌 御酒 養老酒 御茶

十六日朝奠

御猪口 水な 御汁 結かんひやう
 御平 山のいも 御飯 御香物 なら漬瓜
 御菓子 唐菓子 御茶
 夕奠 月色如昼 御猪口 結干鰯 御汁 岩たけ
 御平 けんちやん 御飯 御香物 なら漬瓜
 御向話 山のいも 御酒 御肴 ひうとん胡麻 御茶

十八日朝奠

御猪口 梅肉かけ 御汁 海鹿
 御平 葛から手 御飯 御香物 あさつげ
 御菓子 灘波津 御茶
 夕奠 御猪口 ずせうゆう 御汁 かわらし
 御酒 御向話 余日 御肴 すもぞく 御茶

表1 「梅颯御供」冊子の構成

年月日	冊子	没後 日数	献立 番号	丁			註				
				朝奠	午後奠 午奠	夕奠 夜祭奠					
天保 14年 癸卯	12月	9日	—	0	—	—	梅颯没				
		10日	—	1	—	—					
		11日	朝夕 奠御 献立	2	1	1オウ	—	2オウ	発引 (=出棺)		
		12日		3	2	3オ	3ウ	4オウ			
		13日		4	3	5オ	—	5ウ			
		14日		5	4	6オ	—	6ウ			
		15日		6	5	7オ	—	7ウ			
		16日		7	6	8オ	—	8ウ			
		17日		8	7	9オ	—	9ウ			
		18日		9	8	10オ	—	10ウ			
		19日		10	9	11オ	—	11ウ			
		20日		11	10	12オ	—	12ウ			
		21日		12	11	13オ	—	13ウ			
		22日		13	12	14オ	—	14ウ			
		23日		14	13	15オ	—	15ウ			
		24日		15	14	16オ	—	16ウ			
		25日		16	15	17オ	—	17ウ			
		26日		17	16	18オ	—	18ウ			
		27日	18	17	19オ	—	19ウ20オ				
		28日	19	18	21オ	—	21ウ				
		除日	20	19	22オ	—	22ウ				
		天保 15年 — 弘化 元年 甲辰	正月	朝夕 奠御 献立	元日	21	20	23オ	—	23ウ	
					2日	22	21	24オ	—	24ウ	朝奠に雑煮 (雑煮、献煮)
					3日	23	22	25オ	—	25ウ	
4日	24				23	26オ	—	26ウ			
5日	25				24	27オ	—	27ウ			
6日	26				25	28オ	—	28ウ			
7日	27				26	29オ	—	29ウ	朝奠に七草粥 (七菜羹)		
8日	28				27	30オ	—	30ウ			
9日	29				28	31オ	—	31ウ			
10日	30				29	32オ	—	32ウ			
11日	31				30	33オ	—	33ウ			
12日	32				31	34オ	—	34ウ			
13日	33				32	35オ	—	35ウ			
14日	34				33	36オ	—	36ウ			
15日	35				34	37オ	—	37ウ	朝奠に小豆粥		
16日	36				35	38オ	—	38ウ			
17日	37			36	39オ	—	39ウ				
18日	38			37	40オ	—	40ウ				
19日	39			38	41オ	—	41ウ				
20日	40			39	42オ	—	42ウ				
朝夕 奠御 献立	21日			41	40	43オ	—	43ウ			
	22日			42	41	44オ	—	44ウ			
	23日			43	42	45オ	—	45ウ			
	24日			44	43	46オ	—	46ウ			
	25日	45	44	47オ	—	34ウ					
	26日	46	45	48オ	—	48ウ					
	27日	47	46	49オ	—	49ウ					
	28日	48	47	50オ	—	50ウ					
	29日	49	48	51オ	—	51ウ52オ					
	2月	1日	50	—	—	—	—	梅颯忌明だったが、4代享翁忌日祭執行			
2日		51	—	—	—	—	祠堂開簾上香				
3日		52	—	—	—	—	聿庵のみで、高祖考から考までに酒肴献上、御耐祭拜告/吉祭として親戚で供物を分け食べ精進落ちとした				
4日		53	—	—	—	52ウ	聿庵「梅颯御供」記述終了				

三 聿庵による忌明けの記載

「梅颯御供」の最終部分には、忌明けの様子が聿庵によって記されている。その内容は以下のとおりである。

二月一日は忌明けであり、その上この日は剛日なので、すぐに先祖にあわせてお祭りするべきはずなのだが、亨翁様の御忌日なので、御忌祭だけにして御拵は行わなかった。曆を調べたところ、三日は剛日なので、前日の二日に祠堂を開けて上香し、翌日（三日）に御拵を行うことを拝告した。主人（余一聿庵）だけで、親戚皆での拝礼までは行わなかった。三日祠堂を開けて上香し、高祖考から全ての御霊に酒肴を献上し、この日初めて、吉祭とした。供えた食品は全て下男下女に下げろべきだが、既に忌明け後、三日も経っているので、親戚の者でこれを頂いて、精進落ちとした。

今後これらの献立内容をさらに詳細に調査し、頼家に伝わるその他の献立内容^{4・8}との比較検討を行うことにより、江戸後期の儒教家庭における食生活について検討してゆく予定である。

謝辞

本研究は、お茶の水女子大学ジェンダー研究センタープロジェクト（梅颯日記を読む会）（代表 大口勇次郎お茶の水女子大学名誉教授）の活動をさらに発展させて行ったものである。頼山陽史跡資料館（広島県広島市中区袋町五番一五号）の荒木清二氏および花本哲志氏には、資料閲覧に関して多大のご配慮をいた

だいたことを深謝する。

文献

- (1) 小竹佐知子・大久保恵子「頼山陽の母が書き残した『梅颯日記』にみる食物関連事項とその内容の特徴」日本家政学会誌、第六〇巻、四五―五六頁（二〇〇九）
 - (2) 小竹佐知子・大久保恵子「頼家『家祭年中行事控』の内容と食品」日本家政学会誌、第六〇巻、一三九―一五二頁（二〇〇九）
 - (3) 小竹佐知子・大久保恵子「頼家献立資料の分類と解説」山梨県立女子短期大学紀要、第三五巻、四一―五二（二〇〇二）
 - (4) 小竹佐知子・大久保恵子「頼家忌祭献立の翻刻と解説 ―その一 初代・二代―」お茶の水女子大学大学院、人間文化研究年報、第二六号、一―一五頁（二〇〇三）
 - (5) 大久保恵子・小竹佐知子「頼家忌祭献立の翻刻と解説 ―その二 三代およびその弟達―」お茶の水女子大学大学院、人間文化研究年報、第二七号、七一―二二頁（二〇〇四）
 - (6) 小竹佐知子・大久保恵子「頼家忌祭献立の翻刻と解説 ―その三 四代―」お茶の水女子大学大学院、人間文化論叢、第七巻、一―一二頁（二〇〇五）
 - (7) 大久保恵子・小竹佐知子「頼家忌祭献立の翻刻と解説 ―その四 五代、六代―」お茶の水女子大学大学院、人間文化研究年報、第九巻、一―一〇頁（二〇〇七）
 - (8) 小竹佐知子・大久保恵子「頼家時祭献立ならびにその他の饗応献立の翻刻と解説」お茶の水女子大学大学院、人間文化創成科学論叢、第一〇巻、一―一六頁（二〇〇八）
 - (9) 小竹佐知子・大久保恵子「頼家家祭年中行事控」の翻刻および解説」山梨県立女子短期大学紀要、第三五巻、五三―五六（二〇〇二）
- （おだけさちこ／日本獣医生命科学大学 准教授）（おおくぼけいこ／都留文科大学 非常勤講師）